



CONTENTS

巻頭寄稿	1
活動紹介	2~7
開催報告	8

静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター
 静岡県浜松市中区中央2丁目1-1 〒430-8533
 ●Tel:053-457-6105 ●Fax:053-457-6123 ●http://www.suac.ac.jp/

A r t & C u l t u r e



文化政策学部国際文化学専攻長
下澤 嶽
 Takashi Shimosawa

日本社会とボランティア

6年前、NPO・NGO論の初回の授業で、「ボランティアについてどう思うか」を学生に書かせたことがある。ボランティアへの関心はあるが「自己満足」「偽善的」と見られることに不安やとまどいを感じている学生が8割近くを占め、驚いたことを覚えている。それまでボランティア活動の現場にいたので、日本社会のボランティア活動への認識は徐々に肯定的になっていると錯覚していた。私の学生の頃とボランティアの認識はあまり状況が変わっていないのではないかと思うようになった。

日本人はどうして、ボランティアに過度な理想像を求め、それに自分が至らない不安をいつも考えてしまうのだろう。他者の目にさらされることを怖れ、ボランティア活動への一歩を躊躇するのだろう。仕事でボランティアの現場にいた頃は「日本のボランティア活動を一日も早く欧米レベルに近づけること」が私の中にあった暗黙の「ものさし」であったが、このことがきっかけで、ボランティアを近寄りがたいものにしてしまう何が日本文化の基層にあるのではないかと考えるようになった。

日本のボランティア観を過去の事例から学ぼうと、この1年半ちかく日本赤十字社と共同募金（赤い羽根募金）の研究に取り組んだ。この二つの団体の募金活動は400億円近い募金を日本全国から毎年集めている。どちらも共通しているのは、募金の8割近くを自治会・町内会等の戸別募金から集めていること、そして長い歴史を持っていることだ。日本赤十字社は明治10年に佐野常民によって、共同募金は昭和22年にGHQの指示で中央政府の指導のもとで開始された。戸別募金とは自治会・町内会等の役員らが、一軒一軒組合員の家を周り、300円～500円程度の募金を集めるものだ。だから、あらゆる年代の日本人がこの募金活動のことを知っている。

明治以後、自治会・町内会等は自然発生的に都市などで組織

されていった。昭和15年に出された内務省訓令「部落会町内会等整備要綱」によって自治会・町内会等の統制と画一化・機能化が格段と進み、自治会・町内会等を通じた戦時募金（集金ともいえる）の基礎がほぼ完成する。戦後GHQは、こうした自治会・町内会等が戦時中の体制を下支えするものだったとし、自治会・町内会等の組織化と活動を禁止した。しかし、配給システムと安全や統制を望む住民は、GHQの方針とはうらはらに自治会・町内会等を勝手に立ち上げていった。片方GHQは民間の社会福祉団体が戦前のように国の補助金に依存するのではなく自立するべきと、資金づくりのために共同募金を日本政府に実施させた。しかし、結果的にGHQが禁止していた自治会・町内会等が中心になって、戦後の物資の少ないなか6億7820万円もの寄付を戸別募金で集めることに成功した。

なによりも驚くのは、自治会・町内会等が住民の意思で再建され、半強制的かとも思われた戸別募金が募金のエンジン部分として再稼働したことである。ここに日本文化の基層部分を感じないわけにはいかない。

そこには、人々が地域（コミュニティ）でつながりあって行動しようとする規範、そして行政政策や意向から外れようとする住民の本能とも言えるような行動選択がある。そして突出しないように横並びに社会参加（または社会奉仕）することに抵抗を感じない不思議さ。むしろ「ボランティア」を自称する人間は、「目立ちたがり屋」といった隠れたまなざしがある。これは私が6年前に学生から感じ取ったものである。

日本赤十字社の募金は1996年から、共同募金は1998年から募金額が減少を始めた。今もその下降現象は止まっていない。阪神淡路大震災があった1995年が「ボランティア元年」と言われ、1998年にNPO法の制定へと向かう市民活動の大きな変化の中で、この募金の減少は象徴的な現象である。原因は都市部の自治会・町内会等への加盟率の低下、また主体的な個人寄付スタイルの拡大があると思われる。ゆっくりとではあるが「自分で決めて行動する」スタイルの人々が広がっている証拠でもある。かといって横並び型の募金スタイルがすぐに消えるわけではなく、両者が入り混じりながら発展していくのだろう。

個人で考えるのではなく、集団で考える（というか感じ合う）日本文化。責任も集団で負う。2011年の原発事故がよい例ではないか。そうした日本文化がもしあるとすれば、日本のボランティアの強みははたして何だろう。申し訳ないが、まだ答えがわかっておらず研究中である。

つむぎ女子プロジェクト -学生の感性を生かして、地域の伝統素材を活性化する-

森山一郎 (文化政策学科)

1. つむぎ女子の結成

つむぎ女子プロジェクトは、(株)遠鉄百貨店、(有)ぬくもり工房(遠州綿紬製品の企画・販売、浜松市浜北区)、静岡文化芸術大学の三者が共同で地域の伝統素材である遠州綿紬の商品開発を行い、販売しようというプロジェクトです。もともと遠鉄百貨店さんには、若者離れが指摘される百貨店に若い人々を呼び込みたいというニーズがありました。そのようなニーズに、遠州地方の伝統素材を活性化させたいというぬくもり工房さんの想いと、学生たちに実践的な教育機会を提供するという静岡文化芸術大学のポリシーが共鳴し、学生たちの若い感性を生かした商品開発を行って、それを実際に百貨店で販売しようというプロジェクトがスタートすることになりました。



2015年5月のプロジェクト開始にあたり、静岡文化芸術大学の文化政策学部・デザイン学部のそれぞれから合計7名(3年生)の学生たちが参加することになり、「つむぎだっておめかししたい!」をコンセプトに「つむぎ女子」が結成されました(メンバー:文化政策学部=岩田愛海、小林茉莉、水野由貴、依田晴佳、デザイン学部=磯部亜紗佳、鈴木麻由、鈴木美香)。この「つむぎ女子」プロジェクトは、文化政策学部とデザイン学部両学部の学生が、お互いの強みを生かして協働するところに大きな特徴がありました。

2. 商品開発の苦勞

早速、学生たちは「かわいい商品を作りたい!」という想いで商品開発に向けたディスカッションに取り組みました。しかし、思うように進みません。学生たちは、どのような要素が「かわいい」につながるのかを具体的に表現することができなかったからです。

2. 商品開発の苦勞

そこで、遠州綿紬の多様な生地・製品サンプルを取り寄せ、どのような色・柄がかわいいのか、どのような形状がかわいいのか、どのような組み合わせがかわいいのかを具体的に検討していくことになりました。結果的にそれらは、がま口、巾着、ハンカチの3アイテムを6つのコンセプト(潤・凜・素・陽・律・粋)のもとに展開するという全体構想として整理されました。

そこで、遠州綿紬の多様な生地・製品サンプルを取り寄せ、どのような色・柄がかわいいのか、どのような形状がかわいいのか、どのような組み合わせがかわいいのかを具体的に検討していくことになりました。結果的にそれらは、がま口、巾着、ハンカチの3アイテムを6つのコンセプト(潤・凜・素・陽・律・粋)のもとに展開するという全体構想として整理されました。



た。これらは、学生たちの感性を通して遠州綿紬の多様な色柄を再構成していく過程だったわけですが、講義・演習等の空き時間はほとんど「つむぎ女子」の活動に充てるという学生たちの頑張りがあればこそ、プロジェクトのスタートから約2か月での企画提案につなげることができました。

また、つむぎ女子のロゴマーク、製品に付ける布タグ、売場展開時の販促物などについても併せて提案することができました。これらは、デザイン学部の学生たちの活躍によるものです。

3. プロジェクトの成果

学生たちの企画した商品は、2015年11月4日(水)から17日(火)まで、遠鉄百貨店本館7Fのキッチンテラスにて販売されました。販売実績は予想を大きく超え、販売2週目には商品が品薄になるという状況で、遠鉄百貨店の設定した販売目標もクリアすることができました。売場には、年配の方から若い人たちまで多くの顧客が訪れ、商品を手にとっては笑顔で「かわいい」と呟く様子が見られました。学生たちの若い感性が幅広い世代の共感を呼び、伝統素材を活性化することができたわけです。

また、静岡文化芸術大学の学生たちが伝統素材の商品開発に取り組んだというテーマ性から、「つむぎ女子」はテレビや新聞等でも大きく取り上げられました。学生たちの頑張り、百貨店やメディアの活性化にも貢献したことになります(2015



年10月31日付日本経済新聞/地域経済面、11月2日付静岡新聞等に記事掲載。また、11月11日付静岡第一テレビ「news every. しずおか」にてつむぎ女子の活動を紹介など)。

4. 今後に向けて

今回の「つむぎ女子」プロジェクトは、伝統素材や百貨店という若い人たちからは縁遠い存在とされていたものの活性化に、若い感性が貢献できることを示しています。今後、さらに拡がりの予想できる取り組みだといえます。

しかし、私たちとしては、学生にとってより良い教育機会が提供できるよう、さらに工夫を重ねていかなければなりません。今回のプロジェクトにおいても、企画提案までのリードタイムの短さ、講義・演習・サークル活動等を抱えている学生の負担、学生の企画・制作物の権利帰属の問題など、多くの課題が抽出されました。これらの課題を解決しながら、地域に貢献する大学として地域の企業と協働し、それを通じて学生の成長を促進するという実践型のプロジェクトにこれからも取り組む必要性を感じています。

活動紹介

イタリア伝統の仮面劇コンメディア・デッラルテの公演 ～ボローニャのフラテルナル劇団による Masquerade Mask

高田和文 (副学長・文化・芸術研究センター長)

本公演は静岡文化芸術大学文化・芸術研究センターの主催で、2015年10月23日に本学講堂において行われ、一般市民に無料で公開された。また、公演の翌日には、浜松市中区ゆりの木通りの万年橋パークビルにおいて、やはりフラテルナル劇団の俳優によるワークショップが行われ、地域の劇団員、大学演劇サークルや高校演劇部のメンバーが参加した。

「コンメディア・デッラルテ」とは、16世紀末に成立したイタリアの伝統的な仮面劇である。その後、イタリアのみならずヨーロッパ各地で流行し、約200年にわたって人気を博した。台本を使わず、おおまかな筋書にそって俳優が即興で演じるのが最大の特徴である。また、主要な人物が仮面と独特の衣裳を着けて登場、風刺の利いたギャグとアクロバティックな演技で大いに客席を沸かせた。道化の召使いアルレッキーノやヴェネツィアの老商人パンタローネ、ボローニャのえせ学者ドットーレなど、コンメディア・デッラルテの主要なキャラクターは、今も多くの人々に親しまれている。

今回の作品はボローニャを拠点に活動するフラテルナル劇団によって演じられた。同劇団は2000年に設立され、劇団名の「フラテルナル」は公正証書に記録されているイタリアの古い劇団の名前に由来する。彼らは設立当初からハンディキャップを抱えた人や社会的弱者、マイノリティー、ホームレスなどととも演じる「相互作用型」の演劇活動を行っている。つまり、「社会的包摂」(ソーシャル・インクルージョン)という視点を演劇活動に取り入れているのである。これまでに日本(大阪、山形)、トルコ(イスタンブール)、スペイン(マラガ)など、海外公演も精力的に行っている。2010年2月には、ユネスコとITI(国際演劇協会)イタリアセンターの後援のもとに、ボローニャで第1回「世界コンメディア・デッラルテの日」を開催した実績もある。

さて、Masquerade Mask(偽りの仮面)と題した今回の上演は、映像とナレーションでコンメディア・デッラルテの歴史的發展をたどりながら、その間に短い場面を挟み込んでゆくという形で進められた。演じられた場面とそのあらすじはおおよそ次の通りである。

1. ザンニ

道化のザンニが夢を見て、空腹のあまり自分の体の一部を次々に食べ始める。足から膝、そして股の間までむさぼり喰う…さらに、手の指をしゃぶり…内臓をえぐり出して食べてしまう…すると、一匹のハエが飛んでくる。ザンニはそれを捕まえて食べようとする…

2. 農夫とマルゲリータ

眠り込んだ貧しい農夫がノミに悩まされ、体をかきむしる。相手の女マルゲリータも同じ。2人は苦痛のあまり、ベッドやマットを燃やしてしまおうと言う。ところが、自分の体をかいているうちに、2人ともだんだん興奮してくる…

3. ペドロリーノとペダンテ

召使いのペドロリーノは、物知り顔で口うるさい人物ペダンテを毛嫌いしている。ペダンテは、世の中の飢餓の問題を解決するには、新鮮な空気を吸うだけでよいという珍妙な論理でペドロリーノを納得させようとする。ペドロリーノは、何とかペ

ダンテから逃れようとするが…

4. フランチェスキーナ

女性の召使いフランチェスキーナのモノローグ。道に捨てられたメロンの皮が思わぬ災いを引き起こす。彼女の恋人カピターノ(隊長)がメロンの皮で足を滑らせ、フランチェスキーナを押し倒し、何と彼女を妊娠させてしまったのだ。フランチェスキーナはそこから、親が無理やり押し付けた結婚はうまく行かないという教訓を導く。

5. バランツォーネ(ドットーレ)

バランツォーネが長たらしい演説を繰り返す。三段論法と比喩、美しいイメージと見事なアイデアを巧みに駆使しながら、実は何の中身もない話を延々としている。

6. カピターノ(隊長)

続いて誇大妄想にとりつかれたカピターノが登場し、自分の忠実な軍馬ブチェファロを自慢げに紹介する。彼は当時イタリアを占領していた外国人兵士を象徴する人物である。けれども、ある貴婦人の愛の虜になり、たちまち地面にひれ伏してしまう。

7. アルレッキーノと3人の魔女

貧しい召使いのアルレッキーノは、主人の言いつけで3人の魔女のもとに愛の妙薬を取りに行く。ところが、彼は知らずにそれを自分で飲んでしまう。その結果、とんでもない悩みにとりつかれる羽目になる…

8. 狂言「附子」

コンメディア・デッラルテと多くの共通点を持つと言われる狂言を題材にした場面。2人のザンニが狂言の「附子」(ぶす)を演じる。召使いと主人とのこっけいなやり取りが繰り返される。

これらの場面を演じたのは、フラテルナル劇団のマッシモ・マッキヤヴェッリとターニャ・パッサリーニの2人である。しかし、彼らが仮面と衣裳を次々に取り換えて登場するので、あたかも何人もの俳優が演じているかのように見える多彩な舞台だった。そして、上演の間ずっとルーチェ・パッサリーニが舞台上でチェロを演奏し、彼らの演技にアクセントを加えた。また、最後の「附子」には、本学芸術文化学科3年生の大河内望らいさんが特別出演し、イタリア人俳優に劣らぬ名演技で絶妙の掛け合いを見せてくれた。

今回の催しは、ボローニャ市と浜松市の文化交流に関する連携が発端となった。このような形の文化交流が今後ますます発展してゆくことを期待している。



室内楽演奏会2015を振り返って

梅田英春 (芸術文化学科)

室内楽演奏会は、芸術文化学科教員である私の監修のもとに、同学科の学生が中心となり、企画・運営に関わる演奏会です。すでに7年余りの歴史があり、当初はクラシック音楽を中心に企画を行ってきましたが、この数年は音楽のジャンルにはこだわらず「世界音楽」のコンサートを企画する演奏会へと変貌しています。今年度からは、新カリキュラムの授業である「地域連携実践演習プログラム」の一つとして授業科目になっており、企画・運営する学生たちは、4月から、毎週火曜日の昼休みにミーティングを続けています。企画・運営はもちろんのこと、予算管理や広報・宣伝も学生が主体となって取り組んでいます。

「室内楽」という名称は、一般にはクラシック音楽における重奏の演奏形態を指していますが、従来もピアノソロのコンサートなどが行われ、すでに厳密な意味での室内楽だけを実施してきたわけではありません。今ではこの名称が学内で定着していることもあり、屋内で世界音楽のコンサートをを行うプロジェクトとして、この名称を使い続けています。

今年度は、5月29日に開催した学内向けのセミナー「浜松の音楽イベントを知る、学ぶ一課題と可能性、文芸大の役割とは」を皮切りに、三つの演奏会を企画・運営してきました（最後の一つは2016年3月20日に実施予定）。セミナーでは、まず浜松市文化振興財団の職員から、浜松がこれまでどのような音楽イベントを行ってきたかを学びました。これは、市が行うイベントと大学が行うイベントの違いや意味を学ぶ意味がたいへん重要なものです。特に新入生はこのセミナーを通して、室内楽演奏会の意味や役割を学んでいきました。

続いて6月8日には、「シリーズ音楽の力 沖縄のうた～命薬としての音楽 沖縄音楽レクチャーコンサート」を実施しました。このシリーズは、今年度から始まったシリーズであり、音楽のもつ様々な「力」をテーマにしたコンサートです。沖縄県立芸術大学の教員である久万田晋氏のレクチャー、大学院生二名の三線演奏者により、沖縄のうたが、沖縄の人々の苦難の歴史の中で「生きる力」となっていることを、音楽を通して200名以上のお客様に伝えました。

秋には二本のイベントを実施しました。一つ目は、10月17日に開催した「風と川と音と——龍山に響くパイプオルガンコンサート」です。地域貢献の一環として、大学を飛び出し中山間地の龍山森林文化会館にあるパイプオルガンを使用し、世界的に活躍するオルガニスト新山恵理氏を迎えてコンサートを開催致しました。また本学教員が曲目解説などを行いました。この演奏会では、学生自身が申請書を作成して、「はままつ文化サポート事業」に応募し、30万円の補助金をいただき、大学の補助で実施しました。

11月14日には、今年で4回目となる「バンバン！ケンバン！はままつ2015」を開催しました。今年度で最後となるこのイベントでは、これまでとは趣を変えて90分のイベントを二本実施しました。一つ目は浜松の音楽産業との連携で実施し

たイベントで、今年度はローランド株式会社、三創楽器製作所の協力により、アコースティックと電子のチェンバロを取り上げ、開発者によるトークやチェンバロ奏者、水永牧子氏によるチェンバロコンサートを実施しました。また、二つ目は、昨年から国際ピアノコンクールが開催されたことから、コンクールでは聴けない日本の昭和初期から現代までの日本の作曲家とサティをテーマに、竹内直氏のレクチャー、河合珠江氏によるピアノコンサートを開催しました。

また3月20日にはシリーズ音楽の力の二つ目のコンサート「時代に抗う作曲家たち——芸術というもうひとつの武器」と題したレクチャー付きのピアノコンサートを行う予定です。

私は、大学で開催するコンサートは大学というアカデミックな場で実施する以上、近隣のホールで行われるイベントとは一線を画した大学だからこそ実施できるようなコンサートでなければならないと思っています。大学の講堂を始め大学施設は興行施設ではありません。会場から出てきたお客様が「楽しかった」と感想を持つだけではいけないと考えています。それに加えて、新しいことを学び、知っていただくことが重要です。さらに、企画運営に参加する学生に対して一定の教育的効果をあげなくてはなりません。またできるだけ地域に貢献することも求められます。学術的、教育的、社会的でなければならないという三つの使命は、ある意味、コンサートやイベントを開催する上で相反する要素ともなりうるのです。室内楽演奏会2015の中で実施してきたコンサートは、そうした要素の比重がそれぞれの演奏会で異なっています。しかし大切なことは、どのイベントも「大学らしさ」が強調できたコンサートであったということでしょう。来年度もさまざまなイベントを企画しており、今年度以上に多種多様な音楽ジャンルのユニークなコンサートが学内外で開催される予定です。今後は、学生・教職員のみならず、浜松市民からも愛されるプロジェクトとして、学外の組織とも連携をとりながら新しい展開をしていきたいと考えています。



演奏者とスタッフ（10月17日、龍山でのパイプオルガンコンサート）

活動紹介

シンポジウム「地域メディアの現在と、そこから生まれる可能性」の開催について

加藤裕治 (文化政策学科)

地域とメディアはどのように関係してきたのか。また現在、どのように関係しているのか。そしてこれからどんな可能性が開かれていくのか。このテーマをもとに2016年1月26日(火)、大学内の南176大講義室にてシンポジウム「地域メディアの現在と、そこから生まれる可能性」を開催しました。

浜松周辺地域のコミュニティメディアとして、地域の人々と密接に関係を構築し、多彩な情報を発信しているFM Haro! (浜松エフエム放送株式会社)様とケーブル・ウィンディ (浜松ケーブルテレビ株式会社)様にも御登壇を頂き、地域メディアの具体的な取り組みについてお話を頂く機会となりました。

まず最初に、今回のシンポジウムを開催することになった3つのきっかけについてお話をしたいと思います。

第1のきっかけは、私と同じ学科に所属する船戸修一先生と共同ではじめた研究でした。船戸先生は私が2012年に赴任したとき、放送番組における農村や地域表象に興味を持たれていました。着任後すぐに共同研究にお誘いして頂き、その後、2014年から2年間にわたり「戦後日本における放送と地域農業の関係性をめぐる考察」をテーマに大学から学長特別研究費、学部長特別研究費も頂き、調査を進めました。

当初私達は、NHKの『明るい農村』内で放送されていた「村の記録」というドキュメンタリー番組を研究していました。しかし研究を進めると、戦後、放送と農村を結ぼうとするラジオ・ファーム・ディレクターという試みをNHKが実施していたことがわかりました。その試みは、各地域の農業改良普及員なども巻き込み、地方の番組制作に大きく関わっていたのです。当時ご活躍していた放送人や地域の方への聞き取り調査を通して、放送と地域の関わりを深く考える研究になっていきました。今回の私の報告は、この成果の一部でもあります。

第2のきっかけは、学生さんにインターネット以外のメディアにも目を向けてほしいとの思いからでした。

学生さんは自ら興味のあることはネット経由で情報を収集し、実によく知っています。しかし、社会的に共有すべきニュースにはあまり興味がわかない人も多いようです。放送はそうしたニュースを知る場であると同時に、自分ではない他者の選んだ情報が流れるため、意外な発見を得ることができるメディアです。こうした放送メディアの持つ役割や魅力を、地域メディアの方をお呼びし、直接、学生に伝えたいと考えていました。

第3のきっかけは大学内の活動から得られたものです。今回登壇頂いた本学地域連携室の富田晋司さん、芸術文化学科の学生さんである大河内望らいさんは、ケーブル・ウィンディで放送されている本学の活動紹介番組『文芸大春秋』の制作をしていたのですが、私はある事情でそれに関わることになりました。大河内さんをはじめ、学生さんが楽しそうに番組制作しているのを見て、地域メディア制作に参加する楽しさを伝えたいと思いました。

またシンポジウムで地域メディアの可能性についてお話を頂いた芸術文化学科の梅田英春先生ですが、以前からFM Haro!の番組でインドネシアの音楽や文化をご紹介していらっしゃる

ことは知っていました。そのため梅田先生にご相談にいったところ、コミュニティラジオがネット経由で海外にいる浜松出身の方などに聞かれ、世界中から番組の感想が寄せられていることを知りました。地域メディアとネットが組み合わされることでグローバルなメディアになっていることがわかり、事例の紹介も含め報告をお願いすることになりました。

当日のシンポジウムは、最初に「趣旨説明・報告」と銘打ち、「地域とメディアはどう関係してきたかー1960-70年代のNHK地方局の活動からー」を私が報告しました。

第2部は「地域メディアは、いま、どんな試みをしているのか&何を指すのか」をテーマに、富田氏から地域メディアの概要を報告して頂きました。次にFM Haro!代表取締役社長の鈴木清様からは、地域をつくるコミュニティラジオの役割といった観点から、地域防災への取り組み、スポーツ中継、地域情報の提供といった多彩なラジオの活動についてお話を頂きました。またケーブル・ウィンディ編成制作部部長の村松得久様からは、魅力ある番組づくりの試みや、200インチ大型ビジョントレーラーなどを活用し、地域との接点をますます増やしていく今後の活動についてご報告を頂きました。

第3部は「地域メディアに参加する&地域メディアの可能性」と題し、『文芸大春秋』の映像を実際に流しながら、番組制作へ参加した経緯や、制作上の苦労や楽しさについて大河内さんから報告を受けました。更に、梅田先生からは、ユネスコ創造都市ネットワーク(音楽)の一員となった浜松が、実際に音楽活動の拠点であることを、内外に示していくアイデアやその具体案の可能性をご報告頂きました。

私の研究と教育、また大学での出会いから発想し開催したシンポジウムでしたが、当日は地域の方々、学生さんを含め、のべ80名ほどのご参加を頂きました。予定時間の関係でフロアからの質問に応えることができなかったのは残念でしたが、参加した学生さんからは「ラジオを聴いてみます!」「私も番組づくりに参加したくなりました」といった声も聞くことができました。今回のシンポジウムの目的が果たせたと思うと同時に、また今後も機会をみて、こうした地域とメディアについて話しあう場を作りたいと考えています。



文化芸術セミナー「美術と音楽の西洋史」を開催

文化・芸術研究センター

ヨーロッパの芸術文化史において、文化運動や様式などを特徴づける「ルネサンス」、「バロック」などの用語は美術、音楽、建築などの領域で一般的に使われていますが、領域により発展した地域や年代に違いがあるといわれています。

2015年度の文化芸術セミナーでは、ヨーロッパの美術史と音楽史を「ルネサンス」、「バロック」、「新古典主義・古典派」という3つのキーワードにより解説し、各回の後半ではルネサンス、バロック、古典派、各様式の音楽が演奏されました。(会場はすべて静岡文化芸術大学講堂)

第1回「ルネサンス」(2015年12月1日)

＜美術＞ 講師：小針由紀隆(芸術文化学科)

「ルネサンス美術」は14世紀にイタリアのフィレンツェで誕生し、16世紀に最盛期を迎えた。当時のフィレンツェは商業、金融業で経済的に大いに繁栄し、メディチ家やフィレンツェの同業者組合などがパトロンとなって、多くの優れた芸術家が集まり、素晴らしい仕事をした。ルネサンス美術の特徴としてはキリスト教と異教の主題が共存していること、遠近の描き方を理論化したこと、自然を尊重したこと、北方との美術交流により、人物描写や背景描写に変化が生じたこと、などである。

＜音楽＞ 講師：上山典子(芸術文化学科)

音楽史における「ルネサンス」は15～16世紀の約200年間、美術史よりも約100年遅い。ルネサンス美術がイタリア・フィレンツェで発達したのに対し、ルネサンス音楽はヨーロッパ大陸の北方で発祥して南方に伝播した。特徴としては、中世の硬い響きが心地よい柔らかな響きになったこと、各声部が作り出す全体としての響きを重視したこと、均整のとれた楽曲構造をもつこと、音楽の国際様式が確立したこと、声楽曲に加え器楽のための音楽も徐々に充実したこと、印刷楽譜となり、楽譜が広く普及したこと、などである。

＜演奏＞ 植原史子(ソプラノ)、水戸茂雄(リュート)が出演し、イギリスのリュート歌曲、フランスのシャンソンなどの声楽曲、リュート独奏曲などが演奏された。

第2回「バロック」(2015年12月8日)

＜美術＞ 講師：田辺清(大東文化大学)

17世紀を中心に、ヨーロッパ絵画に描かれた「楽士と楽器」をテーマとして、様々な絵画作品が紹介された。リュートやギター、ヴィオラ・ダ・ガンバ、チェンバロ、ヴァイオリンなど当時盛んに使われていた楽器とそれを演奏する楽士が描かれた作品が多数ある。

＜音楽＞ 講師：上山典子(芸術文化学科)

バロック音楽は1600年頃から1650年(J・S・バッハの没年)まで(あるいは「1630年代」、「1640年代」までという説も)といわれる。オペラの誕生がバロック音楽の始まりといわれるが、当時のオペラは古代ギリシア悲劇などを題材とする音楽劇であった。バロック音楽の特徴としては、躍動性と運動性、明白な対照とドラマ性、人間の情緒を重視していること、歌詞の持つ情緒や感情の表現を重視すること、激しく深い表現力を持つ劇的な歌詞があること、モノディーという単旋律の独唱と器楽伴奏による声楽様式が興隆したこと、などが挙げ

られる。

＜演奏＞ 植原史子(ソプラノ)、平山亜古(チェンバロ)、西谷尚己(ヴィオラ・ダ・ガンバ)の3名が出演し、J.S.バッハのカンタータ、クーブランのチェンバロ作品などが演奏された。



「美術と音楽の西洋史 バロック」での演奏(2015.12.8)

第3回「新古典主義・古典派」(2015年12月22日)

＜美術＞ 立入正之(芸術文化学科)

美術の「新古典主義」は、フランス革命の後、ナポレオンがフランス・ヨーロッパを主導した時代に生まれた。新古典主義の画家として最も著名なダヴィッドは、古代ローマ建国の歴史にテーマをとった作品を描いている。ナポレオンは、古代ローマの持つイメージ、すなわち規律や正統性といったものが、新しいフランス国家の建設には必要と考えた。ダヴィッドは人体をたくましく、しっかりと描き、享乐的というよりは、力強く、ストーリー性のある絵画を描いた。古代に題材をとったものに加え、ナポレオンが活躍する姿(「サン＝ベルナル峠を越えるボナパルト」)やナポレオンの戴冠式の様子なども描いている。

＜音楽＞ 上山典子(芸術文化学科)

音楽史における古典派は1720年頃から1770年頃までの初期古典派と1770年代から1820年頃までの盛期古典派の時代に分けられる。初期の代表者はJ・S・バッハの次男、C・P・E・バッハ、盛期古典派はウィーン古典派ともいわれ、極めて著名な3人の作曲家、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンがこの時代を代表している。古典派の音楽の特徴としては、優美で単純明快なカンタービレ旋律、単純な分散和音による伴奏、ソナタ形式(二つまたは複数の主題の展開を原理とする)の興隆、オーケストラの2管編成の確立、主題動機労作の技法など。主要なジャンルとしては交響曲、協奏曲、弦楽四重奏曲、ピアノ・ソナタなど今日でも親しまれている器楽曲である。ベートーヴェンはハイドンの仕事を継承しながらも、19世紀の新しい音楽を作り上げた。ベートーヴェンが作曲した交響曲は9曲で、100曲以上のハイドンに比べてかなり少ないが、ベートーヴェンの交響曲は規模も大きく、濃密な作品となっている。

＜演奏＞ 石井園子のピアノ独奏により、C・P・E・バッハ、ハイドン、モーツァルトなどの作品が演奏された。(敬称略)

(文責：地域連携室 富田晋司)

活動紹介

文化・芸術研究センターの情報発信

文化・芸術研究センター

1. 大学の広報活動

もとより教育・研究機関である大学は、近年、大学立地地域の「知の拠点」として、地域連携・地域貢献の機能が益々期待されるようになってきている。文化・芸術研究センターの情報発信＝広報活動は研究活動や地域連携・貢献活動に関わるものを中心となるが、大学の教育・研究リソースを研究活動や地域連携・貢献活動を通じて地域社会、市民社会に還元することは、単に大学の社会的プレゼンスを向上させるだけでなく、大学立地地域の魅力を高め、地域の創造性や都市・地域イメージの向上にも寄与するものと考えられる。

「情報発信・広報活動」は単なる“宣伝”ではない。“PR”とは＜public relations＞であり、文字通り「公（おおやけ）との適切な関係性を構築する」ことを意図したコミュニケーション行為である。研究活動や地域連携・貢献活動に関わる情報を適切な形で発信し、それを受けた地域の産官学諸機関、NPO等の市民組織、一般市民等から様々な形で反応、アクセスを頂く、そのやり取りの継続が大学の研究、地域連携・貢献活動の質を一層高めていく、という「創造的な好循環」を作り出すことが、情報発信・広報活動の目的であり、原点である。それは大学の教育、研究、法人運営などにもプラスの効果を中長期に渡ってもたらすものであると考えられ、今日、情報発信の重要性は益々高まっているといえよう。

2. 静岡文化芸術大学の研究・地域貢献に関わる広報活動

本学の研究や地域連携・貢献に関わる現在の広報活動は、下記の通りである。

①ニュースレター『文化と芸術』の発行

年度2回（原則として9月・3月）の発行、現在のページ数は9月発行分が12ページ、3月発行分が8ページである。学内で取り組まれている研究活動の情報や実施されたイベント・シンポジウム、公開講座、その他の地域貢献活動等について、1テーマにつき2000字程度の報告記事（多くは写真付き）を各号6～7本掲載している。報告記事の執筆は原則として担当の教員によるが、それぞれの活動に関わった学生が一部を分担することもある。

『文化と芸術』は2004年の創刊以来、今号まで23号が発刊されており、現在の発行部数は1400部、そのうち半数は地域の公共図書館や高等学校、公立文化施設等に郵送され、半数は学内の配架やイベント等で直接配布される。

掲載する情報については「学内外への発信」を意識して選定しているが、ページ数に限りがあり、報告記事だけでは本学の研究活動、地域連携活動の全容を紹介しきれものではない。そのため2014年度からは前年度に取り組まれた活動（特別研究、イベント等地域貢献・連携事業、出版助成、本学内での学会開催実績など）の一覧情報を掲載している。

②大学HPでの広報

本学では2000年の開学以来、研究活動や地域貢献活動が活発に行われてきた。これまで本学HPにおいても開催の告知

や実施後の活動報告を都度掲載してきたが、これらの活動実績を体系的に紹介し、データベースとして蓄積、広報する機能が十分に整えられてはいなかった。このため2014年度に企画室、地域連携室の協力を得て、「文化・芸術研究センターサイト」の大幅な拡充を行った。研究センターのサイトを独立して設定し、大学のトップページから文化・芸術研究センターのトップページに遷移できる様、図書館・情報センターなどと並び形で専用の＜バナー＞を貼付している。

研究センターのホームページではセンター設置の目的や機能、活動の全般的な紹介に加え、具体的な活動を体系的に紹介するため、重点目標研究領域、特別研究、イベント・シンポジウム、地域貢献・連携事業、出版助成、産学官連携などの項目別にそれぞれページを設定し、当該ページを入り口として、今後順次、研究成果や事業紹介のデータを蓄積し、外部からもアクセスできるようにする予定である。研究成果や事業紹介のデータベースは画像を含む1シートにコンパクトかつ一般にもわかりやすい形でまとめ、それを起点として論文、研究報告等さらに詳細で専門的な情報にもリンクできるようになる。

また重点目標研究領域の内、アートマネジメントについては、本学で取りまとめた「SUAC芸術経営統計」のデータにアクセスできるようになっており、当該分野の研究者や関係者等に幅広く活用されることが期待されている。

③研究発表大会

本学研究活動の中核となる特別研究（重点目標研究領域を含む）については、年1回、学内会場で「研究発表大会」を開催し、内外に直接発信する機会を設けている。大会開催時には各研究プロジェクトの目的、経緯、成果等をまとめた資料集を作成、配布している。1つの研究プロジェクトについて1シートの形となっており、②で示したデータベースに転用も可能である。発表内容は学内の研究者はもとより、学生や一般市民にもわかりやすいものとなっている。

3. “情報発信センター機能”の充実を図る

特別研究の成果は従来、本学の研究紀要や各研究者が所属する学会での研究発表、学会誌への論文掲載等の形で発信されてきた。しかしながら研究紀要、学会誌論文・研究報告、学会での研究発表等は専ら専門の研究者に向けられたもので、広く一般市民や地域社会に向けられたものではなく、研究者以外の人びとにはアクセスしにくいものである。今後、大学における教育・研究・地域連携・地域貢献等の活動が、一体のものとして推進されながら、各分野にプラスの相互作用、相乗効果を生み出していくためには、研究成果や大学から発信されるイベント・シンポジウムなどの情報が学内はもとより、一般市民、地域社会にも開かれていくことが必要である。文化・芸術研究センターは引き続き、研究活動の推進とともに、それらに関わる情報発信について、中心的な役割を果たしていかなければならない。

（文責：地域連携室 富田晋司）

○平成27年度後期 公開講座「世界情勢の現在を読み解く」

10月31日(土) 国際関係の変動と地政学
佐藤 優(作家・元外務省主任分析官/本学客員教授)



11月14日(土) アジアの相互理解のために
崔 学松(国際文化学科)
11月28日(土) 多様性のある創造的共同体に向かって
崔 学松(国際文化学科)
12月12日(土) アジア半球の時代をどう生き抜くか
手嶋 龍一(外交ジャーナリスト・作家/本学参与)

○平成27年度 研究成果発表会(2015年11月12日開催)

生活文化の形成における家事家電製品のデザインと広告の変遷
伊豆 裕一(デザイン学科)
専門科目への英語教育導入に関する研究
高山 靖子(デザイン学科)
浜名湖水都構想における環境設計手法の提唱
中野 民雄(デザイン学科)
多文化共生分野の地域課題解決に向けた実践的研究
池上 重弘(国際文化学科)
浜松市天竜区水窪町における民間口承文化財(昔話)の採録調査
二本松 康宏(国際文化学科)



パリにおける日本系文化施設の現状と課題
松本 茂章(芸術文化学科)
浜松市の中山間地域における空き家の利活用をめぐる社会学的研究
船戸 修一(文化政策学科)
浜松における民芸運動の事業構造について
黒田 宏治(デザイン学科)

編集後記

『文化と芸術』には毎号、様々な内容の報告が掲載されます。今号をみても演劇、音楽、美術、メディア、商品開発、それに加えて巻頭の下澤先生によるボランティアなど。本誌の多岐にわたる領域は2学部の小規模ながら本学の研究分野の多様性と可能性を表すものといえるでしょう。今回、『情報発信』のことを書かせて頂きましたが、大学からの発信によって、学外の〈産官学民stakeholders〉からの様々なアクセス、アプローチを頂き、コミュニケーションの相互作用によって大学の質量両面の発展、充実を図る、という方向性は21世紀の大学のあり方に適うものと考えます。学外との活発なコミュニケーションこそ、大学のエネルギー源となるものでしょう。(St.)

H r t & C u l t u r e

文化・芸術 Vol.23

文化・芸術研究センター
ニュースレター

March 2016

発行人：高田和文 編集人：富田晋司
発行：静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター
(事務局 静岡文化芸術大学 地域連携室)

